

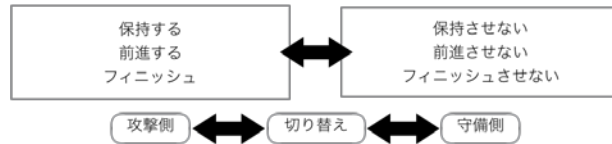
1. サッカーの技術と戦術

本稿では、日本サッカー草創期の技術と戦術について検討することを目的とする。はじめに、サッカーとは何か、サッカーにおける技術と戦術とは何か、という点について整理する。

サッカーは競技規則に基づいて、2つのチームが得点を競い合うゲームである。自分たちがボールを保持している時は、ボールを失わずに相手ゴールに向かい（前進する）、ゴールを奪う（フィニッシュする）ことが目的になる。また、自分たちがボールを保持していない時は、自分たちのゴールを守り、相手の前進を妨害し、相手が保持しているボールを奪うことが目的になる。したがって、サッカーのゲームには、攻撃と守備、さらに、攻撃と守備の切り替わる局面がある。

日本サッカー協会（以下、JFA）は、サッカーの仕組みの原則について次のように示している。攻撃の局面では、相手の背後を突き、ゴールに向かうための「突破」、スペースを創ること、サポートをするための「幅と厚み」、コンビネーションを生み出すための「活動性」、創造力、意外性などの「即興性」がある。守備の局面では、ボールを前へ運ばせないために「遅らせる」こと、カバーリング、ボールやゴールへの「厚みと集結」、ポジショニングやマンマークとゾーンマークの「バランス」、的確な状況判断の「コントロール」がある。攻撃から守備へ切り替わる局面では、「ボールへのプレッシャー」、「相手へのプレッシャー」、「シュートを防ぐこと」、「的確なポジショニングへの素早い修正」、守備から攻撃へ切り替わる局面では、「前へ向かう」、「スペースを創るために拡がる」、「相手の視野から外れる」としている。また、フィールドを3分割し、自ゴールからのエリアを「ディフェンディングサード」、「ミッドフィールドサード」、「アタッキングサード」と呼び、それぞれのエリアで「セーフティ」と「チャレンジ」のバランスが異なるとしている<sup>1</sup>。

サッカーの技術は、ボールのあるところで発揮する技術とボールのないところで発揮する技術がある。JFAは、ボールのあるところで発揮する技術について、一貫指導のコンセプトのもと、子どもの発育発達段階に応じた指導の考え方を指導者が共有し、一人の選手を多くの指導者のリレーによって育成する、長期的視野に立った選手の育成を目指している。この育成年代に身につける技術として、ボールを運ぶ（ドリブル、フェイント）、



	保持	前進	フィニッシュ
攻撃	ボールを保持する	相手ゴール方向へ前進する	ゴールの達成
守備	ボールを保持させない 奪い返す	前進を防ぐ	ゴールを防ぐ

図1. サッカーの仕組み（参考：ランデル・エルナンデス・シマル、倉本和昌訳『スペイン流サッカーライセンス講座』ベースボール・マガジン社、2012年、120-1頁。）

<sup>1</sup> 日本サッカー協会技術委員会監修『サッカー指導教本 2012 JFA 公認 C 級コーチ』日本サッカー協会、2012年、22-23頁。

飛ばす（キック、ヘディング、スローイング）、受ける（コントロール、キャッチング（ゴールキーパー））、奪う（タックル、ショルダー・チャージ）技術をあげている。これらは運動パターンの習熟ではなく、味方、相手がいる中で、正確に、早く、強く、タイミング良く行うことが重要である<sup>2</sup>。また、ボールを扱う技術に加えて、近年の社会環境の変化による子どもの多様な運動経験の不足を考慮し、動きづくりも育成の課題としている。つまり、ボールを扱う、扱わないに関わらず、サッカーのゲームで生じる全てのアクションをどのように実行するかということが技術であるといえる。

サッカーはチームでプレーするスポーツなので、ボールに対して直接プレーする選手とボールに対して直接プレーしない選手がいる。ゲーム中生じる連続したプレーの中で、選手は状況を認知し、次に起こる現象を予測し、自身の適切な技術を発揮することが求められる。各選手が技術を発揮するための判断の基準となるのがチーム戦術である。チャナディは、「戦術とは、与えられた試合条件のもとで最大の効果が発揮できるように、いかにプレーを計画的に、そして合理的に行うかを指示するものである<sup>3</sup>」と述べている。試合条件とは、自チームの選手の能力、相手チームの選手の能力及び相手チームの戦術だけでなく、そのときの天候、グラウンドの状態、リーグ戦なのかノックアウト方式なのか、チームのコンディションなどといった外的な要因も含まれる。サッカーは11人对11人で得点を競い合うゲームであるが、局面をとりあげると、1対1やグループ対グループの場面が連続して存在する。つまり、各選手が状況に応じて判断する個人戦術が重なり合い、グループ戦術となり、チーム全体の戦術として表現される。

例えば、攻撃の局面で、最終ラインを突破するために、ボール保持者が最終ラインの前方のスペースにドリブルでボールを運ぶ。近くの味方選手は、相手最終ラインの選手がボール保持者にアプローチすることを予測し、アプローチすることによって空いたスペースに走り込み、ボール保持者からのスルーパスを受ける。このように、ボール保持者を中心としてそのグループの目的（ここでは最終ラインの突破）を達成するための方法がグループ戦術である。さらに、ボールから遠い位置で相手ディフェンス選手をひきつける選手や奪われた際のリスクを考え、ポジションをとる選手など、チーム戦術に応じて、個人やグループのアクションが選択されていく。チームの最終的な目的は、攻撃ではゴールを奪うこと、守備ではゴールを守ることであるから、そこから逆算して、チーム戦術が設定され、個人やグループの判断の基準となる。「現代サッカーにおいては、戦術と技術の間には完全な調和が要求されて<sup>4</sup>」おり、チーム戦術は、自チームの技術水準に応じて設定される。

## 2. 日本へのサッカーの移入と展開

サッカーの日本への移入について、『日本サッカーのあゆみ』によると「フットボール」は1873（明治6）年の秋、イギリス海軍のダグラス少佐と33名の将校が着任し、訓練の余暇に自分たちが楽しみ、海軍兵学寮（後の海軍兵学校）の日本人にも伝えられたの

---

<sup>2</sup> 同上書、26-7頁。

<sup>3</sup> アルパド・チャナディ 長沼健監修『新版 チャナディのサッカー』ベースボール・マガジン社、1984年、237頁。

<sup>4</sup> 同上書、239頁。

が最初とされている<sup>5</sup>。日本で正式のサッカーの試合が見られたのは1888(明治21)年、横浜居留外国人クラブ(Yokohama County & Athletic Club: YCAC)と神戸居留外国人クラブ(Kobe Regatta & Athletic Club)の定期戦である<sup>6</sup>。

1893(明治26)年に嘉納治五郎が高等師範学校(後の東京高等師範学校、以下、東京高師)の校長に就任し、スポーツが奨励される。1896(明治29)年に「運動会」という組織が結成、「フットボール部」を含む8つの運動部があり、学生は必ずそのうちの一つに所属しなければならなかった<sup>7</sup>。1903(明治36)年、東京高師の教授、坪井玄道<sup>8</sup>が持ち帰った英語の本を中村覚之助が翻訳、編集して『アツシエーション・フットボール』が発行された<sup>9</sup>。この頃から、次第に競技性のあるサッカーが行われるようになったと考えられている。そして、1905(明治38)年、ケンブリッジ大でフットボールのチャンピオンになった人物であるデ・ハビランドが金沢の四高から東京高師に赴任した。デ・ハビランドは、フットボール部の指導スタッフに加わり、技術指導を行うとともにYCACとの対外試合など部の運営にも関係するようになった<sup>10</sup>。東京高師は教員の養成校だったので、その卒業生は日本各地の師範学校や中学校へ赴任し、サッカーの全国的な普及に貢献する<sup>11</sup>。このように、日本サッカー草創期において、東京高師が果たした役割は非常に大きい。本稿では、東京高師フットボール(蹴球)部が発行した二冊のサッカー専門書『アツシエーション・フットボール』と『フットボール』を用い、日本サッカー草創期の技術と戦術を検討する。サッカーの技術や戦術は、競技規則に影響を受ける。特に、ゴール前の局面においては、オフサイド・ルールが重要になる。1925(大正14)年に、現在と同じようなオフサイド・ルールが制定される。このルール改定以前のオフサイド・ルールについて現在のルールとの大きな違いを次項で説明する。

### 3. オフサイド・ルールについて

1925(大正14)年以前、オフサイド・ルールは、ボールがプレーされたときにその選手と相手ゴールのあいだに守備側の選手が少なくとも3人いなければならなかった。つまり、現在のオフサイド・ルールよりも1人多いことになる(図2)。このルールの為、1-2-3-5のピラミッド型システムが用いられた。イングランドでは、1880年代にはこのシ

<sup>5</sup> 日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』講談社、1974年、12頁。

<sup>6</sup> 五島祐治郎『大学サッカーの断想-関東・関西の大学サッカー文化を中心に-』晃洋書房、2009年、71頁。

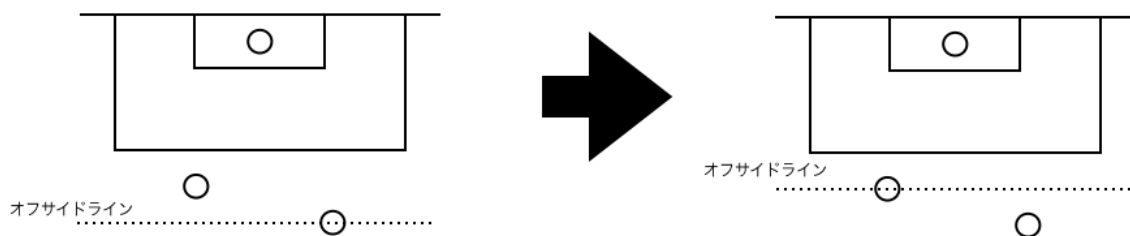
<sup>7</sup> 後藤健生『日本サッカー史-日本代表の90年-』、双葉社、2007年、29頁。

<sup>8</sup> 明治35年、坪井は外遊から帰国後、隊列フットボールを紹介した。これはゴールの設備のないところで行う蹴球で、人数の制限がない。1個のボールを中心に30から50人がボールを蹴り合って決められた地域又は物体にボールを蹴り当てれば1点というルールで行われた。東京朝日新聞社運動部編『朝日スポーツ叢書 第1(ホッケー・ラグビー・蹴球・籠球・排球)』朝日新聞社、1930年、120頁。

<sup>9</sup> 日本サッカー史シンポジウム報告書「熊野の中村覚之助-日本サッカーのパイオニア-」日本サッカー史研究会、2010年、14-15頁。

<sup>10</sup> 五島、前掲書、87頁。

<sup>11</sup> 多和健雄「サッカーの技術史」岸野雄三編『スポーツの技術史』大修館、1972年、484頁。卒業生の主な赴任先には、愛知第一師範、埼玉師範、滋賀師範、豊島師範、御影師範、広島一中などがある。(東京教育大学サッカー部編『東京教育大学サッカー部史』恒文社、1974年、24頁。)



1925年のオフサイド・ルール改定以前

現在のオフサイド・ルール

図2. オフサイド・ルールの変更

システムが標準となっており、日本でサッカーが行われるようになる頃には、このピラミッド型フォーメーションがすでに世界中で用いられていた<sup>12</sup>。

このフォーメーションでは、11人のポジションの名称が、ゴールキーパー、レフト・フルバック、ライト・フルバック、レフト・ハーフバック、センター・ハーフバック、ライト・ハーフバック、レフト・ウイング・フォワード、レフト・インサイド・フォワード、センター・フォワード、ライト・インサイド・フォワード、ライト・ウイング・フォワードとなる(図3)。

このオフサイド・ルールなら、ディフェンスの1人はカバーリングのポジションを取り続けることができ、オフサイド・トラップのリスク、つまり、オフサイド・トラップに失敗した場合、相手選手とゴールキーパーが1対1の決定的な得点のチャンスになることが少なくな

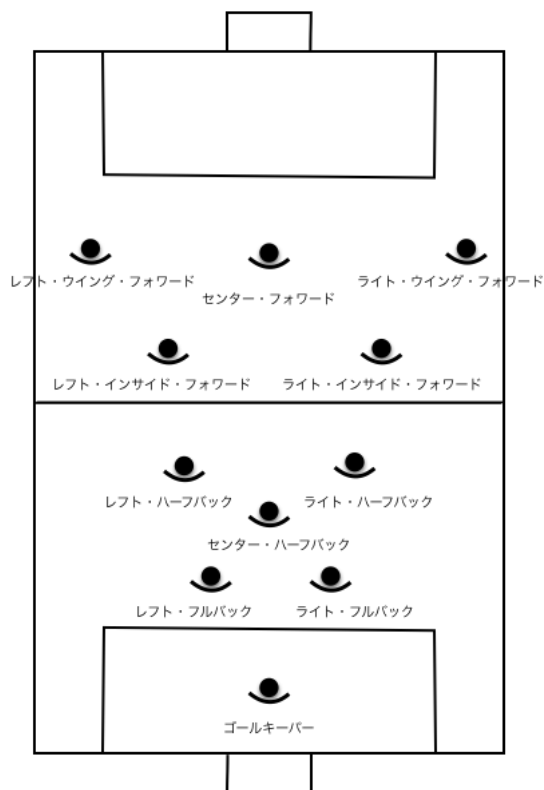


図3. 1-2-3-5 システムのポジション配置と名称

<sup>12</sup> ジョナサン・ウィルソン 野間けい子訳『サッカー戦術の歴史』筑摩書房、2010年、37頁。1903年のオフサイドの用語の修正で「あるプレーヤーがボールをプレーするかタッチから投げ入れるとき、プレーまたは投入のその瞬間に、相手のゴールラインに近く接近している同じサイドのプレーヤーはオフサイドである。したがって、ボールが再びプレーされるまでは、そのプレーヤーはボールにふれることも、相手またはプレーを妨げることもゆるされない。ただし、あるプレーヤーがボールをプレーするかタッチから投げ入れるとき、相手のゴールライン寄りに少なくとも3人の相手がいるときは、ボールにふれてもよいし、相手またはプレーを妨げてよい。コーナーキックの場合、ゴールからキックオフされる場合、相手によって最後にボールがプレーされた場合にはアウトオブプレーにはならない」とされた。多和健雄、長沼健、永嶋正俊編著『サッカーのコーチング』大修館書店、1974年、41頁。

る。したがって、2人のディフェンダーで3人のフォワードと対峙することも可能だった。試合で得点数が少ない問題を解決するために、1925（大正14）年、イングランドFAの提案により、国際フットボール評議会（International Association Football Board）はオフサイドの規則を緩和させた。新ルールでは、これまで味方の選手がオンサイドであるためには、相手側の3選手がその味方とゴールの間にいなければならなかったのが、相手側の選手を1人減らして、2選手にするという内容だった<sup>13</sup>。ルール変更の結果、オフサイド・トラップをしかけるための守備のリスクが非常に大きくなり、それに伴い、守備の戦術の変化、合わせて攻撃の戦術の変化が生まれる。本稿で検討する日本サッカー草創期は、オフサイド・ルール改定以前の競技規則で行われている。

#### 4. 国内初のサッカー専門書『アソシエーション・フットボール』

日本におけるサッカー普及の起点となった東京高師フットボール部は、1903（明治36）年、国内初のサッカー専門書『アソシエーション・フットボール<sup>14</sup>』を出版した。著者は中村覚之助、東京高師の教授でフットボール部の部長だった坪井玄道が序文を寄せている。そこには「此の遊戯が今日我が國に於て一も行はれざるは大ひに余の遺憾とする所其の不振の原因固より多々あらんも要するに其の方法を解する能はざるが爲めなるべく其方法を解せざるは之れ我が國に於て未だ適當なる邦文の書なきに歸因すべきか(序文2頁)」と、当時、日本でサッカーが普及していないことを述べ、その理由として、適切なサッカーを紹介する書物がないことを指摘している。出版の目的は、各地の中学校、師範学校からフットボールの競技方法を知りたいという需要が増加したためであった<sup>15</sup>。内容は、著者の経験と欧米の書物を比較参考にして書かれた。そこには競技規則や必要な用具に関する説明がある。また、戦術に関しては、1-2-3-5 システムの各ポジションの役割を説明しており、その中で技術に関する言及がある。

サッカーの特質について、「集散、離合、攻撃、防守の種々複雑なる場合多くあり。(略)人数甚だ多く「ゲーム」中に起り得る出来事、甚だ複雑なれば、大に其の組全體の一致共同、常に、有機的行爲に出づるの必要なるや、固より論無し(43頁)」とし、サッカーが複雑であることやゲームの中でチームが共同する必要性を指摘している。また、「由來、日本人は、一騎打ちをなし、魁の功名を得んとするの念甚だ深く、(略)自榮心や魁の功名心や、共同的團體的、遊戯に於て、甚だ忌むべきことにして、少なくとも、此の「フットボールゲーム」に於ては、固く禁ぜざる可からず(43頁)」と、自分勝手なプレーを戒めている。特に具体的なプレーとして、自分がボールを蹴ることを第一に考えるのではなく、自分よりいいポジションにいる選手にボールをパスすることを勧めている。戦術的な狙いについては、チームが共同し有機的に関わりあうことの必要性が述べられているものの、具体的な内容は示されていない。

『アソシエーション・フットボール』では、各ポジションにそれぞれ必要な技術を提示している。以下、その概要を整理する。

<sup>13</sup> ウィルソン、前掲書、59-60頁。

<sup>14</sup> 東京高等師範学校フットボール部編『アソシエーション・フットボール』鍾美堂、1903年。第4項の引用「」の（）内のページ番号は『アソシエーション・フットボール』のページ番号である。

<sup>15</sup> 同上書、凡例1頁。

ゴールキーパーは、ポジショニングについて書かれている。通常の守備の場合、ゴールラインより1、2歩前に立ち、相手がシュートを打つ際には、ゴールライン上でゴールの真ん中に立つ<sup>16</sup>。この時の競技規則では、ゴールキーパーはフィールドの半分の自陣側のどこでもボールを手で扱えるが、ボールに積極的に関わるのではなく、まず、ゴールを守ることの重要性を述べている。

フルバックは、2人がそのポジションを担当する。必要な能力として、両足で狙い通りに蹴ることと強い体力をあげている。また、守備の際は相手のフォワードをオフサイドにすることが有益な方法だとしている。そして、相手からプレッシャーを受けた場合、ボールを味方のウイング・プレーヤーにパスすることを勧めている。パスの質に関して、グラウンダーのパスを推奨している。パスの対象は、遠くのプレーヤーでなくても、いい位置にいる前方の味方で、パスの方法として、「足の(側方)を以てするを最も便利とす(55頁)」とし、インサイド・キックと考えられる技術を紹介している<sup>17</sup>。いい位置については、「便利なる位置」と書かれているだけで、定義づけされていない。

ハーフバックは、守備と攻撃のタスクがあるとし、必要な能力として、相手のフォワードの攻撃を予測し、対応する素早い判断力とボールを両足で扱うことをあげている。守備の際は一端自陣に下がり、ファールをせずにボールを奪い、味方のフォワードにパスすることを求めている。また、攻撃時のパスの質に関して、「其の方向と、速力の適度を計り「フォワーズ(ママ)」をして之を直ちに蹴るに自由ならしめざる可からず(58頁)」とし、角度、速さを考え、味方が受けやすいようパスを出すことが良いとしている。ゴールを目指すことに関して、「殆ど、稀にして、寧ろ皆無(58頁)」とし、ハーフバックがゴールに関わる動きがないことを示している。そして、自チームのフォワードがゴールを目指している際は、後方のリスク管理をするべきだとしている。プレーヤーの配置に関して、右足の得意な選手を右側、左足の得意な選手を左側としている<sup>18</sup>。

フォワード(原文はフオワード)は、攻撃を第一のタスクとし、必要な能力として、強い体力と根気をあげている。また、シュートについて、ゴールキーパーとゴールポストの間で、高さは約30から60センチメートル(一、二尺)を狙い、ゴールキーパーがハイボールに強い場合やグラウンダーの処理が得意な場合があるので、その点を観察する必要があるとしている。そして、「足の側方」を使ってカーブをかけてゴールを狙うことやゴールキーパーが近づいたときは、ゴールキーパーの頭を越えたループ・シュートの方法があることを例示している。守備に関しては、基本的にはハーフバックより後方の味方に任せ、味方からのパスを待ち、それに対応することとし、守備に加わる必要がないことを述べている。プレーヤーの配置に関して、ハーフバックと同様、右足の得意な選手を右側、左足の得意な選手を左側としている。センター・フォワード1人、ライト・ウイングとレフト・ウイングがそれぞれ2人ずつの合計5人で構成する<sup>19</sup>。

このように、各ポジションの役割を述べる中で、攻撃の局面は、フォワードが中心で、ハーフバックより後ろの選手は、攻撃が失敗した場合、こぼれたボールを拾うサポートと

---

<sup>16</sup> 同上書、45-51頁。

<sup>17</sup> 同上書、51-55頁。

<sup>18</sup> 同上書、56-59頁。

<sup>19</sup> 同上書、59-63頁。

ボールが奪われ、攻撃から守備に局面が移った場合のリスク管理であり、ポジションによって役割が決まっていた。守備の局面は、一つの方法として、オフサイドを狙うことがあげられていたが、その他の具体的なボールを奪う方法についての記述はなかった。各ポジションの必要な能力としてあげられていたのが、体力、気力、両足を使えることで、技術の詳細な紹介はない。また、足の側方でのキックが紹介されており、文脈から正確なパスを出すためのインサイド・キックと考えられるが、挿絵などがないたため、具体的にどのようなキックなのか不明である。攻守の切り替え局面に関する言及はない。しかし、ポジションによって役割が分かれているため、攻撃時には、ハーフバックやフルバックの選手が攻守の切り替わった際のリスク管理に関する指摘がある。反対に、守備時には、フォワードは守備に参加せず、前線に残り、味方バックスが蹴り出したボールに関わることの指摘がある。

##### 5. サッカー普及のために出版された『フットボール』

5年後、再び東京高師からサッカーの専門書『フットボール<sup>20</sup>』が出版される。その序文で出版の目的が述べられている。そこには、『アソシエーション・フットボール』が出版されたのは、日本におけるサッカーのはじまりの段階であり、不足している点がある。この間、毎年、1、2回外国人と試合をし、その経験から、また、中学校や師範学校から競技方法の問い合わせがあったことから、『フットボール』が作成されることになったと書かれている<sup>21</sup>。そして、その内容は、フットボールの歴史、競技規則や必要な用具の説明、各ポジションの説明、様々な技術についてとその練習方法を掲載している。さらに、各ポジションについて、ゴールキーパーは新帯國太郎、フルバックは重藤省一、ハーフバックとセンター・フォワード、インナー・フォワードは落合秀穂、アウトサイド・フォワードは細木忠明、というように東京高師の現役部員が解説している。

『フットボール』における各ポジションの説明は、前著『アソシエーション・フットボール』に比べると簡略化され、ポジションごとの役割と必要な条件を簡潔に提示している。ゴールキーパーの役割は、最後の防御、必要な条件として、適切な判断をするための落ち着きとためらわずに決断すること（沈着と果断）をあげている。フルバックの役割は、専ら防御だけであるとし、必要な条件として、ボールを遠くまで蹴る力と相手のボールを奪うための敏捷性（強蹴と機敏）をあげている。ハーフバックの役割は、基本的には守備をベースに、フォワードの攻撃をサポートすることであるとし、必要な条件として、攻守に関わるための運動量と守備の第一線としてボールを奪うこと（疾走と奪球）をあげている。このことから、フォワードは守備には関わらず、ハーフバックとフルバックで守備を行っていると考えることができる。フォワードの役割は、専ら攻撃に参加することであるとし、必要な条件として、よく走ること、相手がボールを奪いに来た際、パスで回避する技術、さらにセンター・フォワードはボールをゴールに正しく蹴り込むこと（軽快、

<sup>20</sup> 東京高等師範学校校友会蹴球部『フットボール』大日本図書、1908年。第5項の引用「」の（）内のページ番号は『フットボール』のページ番号である。

<sup>21</sup> 同上書、序文1-2頁。

蹴渡すこと、正蹴)が必要であるとしている<sup>22</sup>。各ポジションの説明で書かれている必要な条件には、ボールを扱う技術がほとんどあげられていない。

ボールを扱う技術については、別途、練習方法で提示されている。内容は「基本練習」としてのボールフィーリング、円を作った「パス」、体からボールを離さない「ドリブリング」、二人あるいは三人が並んで行う「ドリブンリングとパス」、ボールをコントロールしてから「ゴールに蹴込む練習」、「コーナーキック」が紹介されている<sup>23</sup>。

本書の特徴の一つは、東京高師蹴球部の現役部員が各ポジションについて解説している点にある。ここから、当時、行われていた或いは目標とされたサッカーを検討することができる。本稿では、その解説から技術・戦術面を中心に整理する。

ゴールキーパーは、精神面としての沈着、果断に加え、身長の高さも必要であるとされている。プレーについては、「防御の時」、「コーナーキックとペナルティキック」、「攻撃の時」、「ゴールキック」、「フルバックとの連絡」、「ゲーム以外の練習」に分けられ、解説されている。ここでは、「防御の時」、「攻撃の時」について整理する。

「防御の時」、いわゆる守備の局面のゴールキーパーのポジショニングについて、相手に攻め込まれた場合、ゴールライン上の真ん中に立つことが最も良いとしている。セービングについて、身体から30から60センチメートル程度離れたグラウンダーのボールに対して、手を使うのは困難であるから、脚を広げて防ぐべきだとしている。手を使うのは、胸より高い所に来るボールであるとしている。地面から30から60センチメートル程度の高さでライナー性のボールに対しては、「之を受け止めるさへ困難であつて、之を直ぐ蹴返す様なことは非常にむづかしいが而し練習によつては出来ないことはない(131頁)」としている。つまり、ボールを蹴り返すことのできそうな状況であれば、ボールを止めるのではなく、蹴り返し、自陣ゴールからボールを遠い位置に置こうとしていたと考えることができる。また、ゴールキーパーがボールに触るケースというのは、自チームが危険な場面であり、蹴り返すチャンスはほとんどない。そのため、「握り拳をしつかりかためて、うんといふ程、ボールをなぐつてやる(132頁)」パンチングの技術を紹介している。

「攻撃の時」、「よくボールに注意し、全軍を監視することを怠らないゴール・キーパーは、機会を逸せず臨機應變の行動を以て敵の氣鋒を挫き(138頁)」とし、ゴールキーパーは、相手のクリアボールに対して蹴り返すための準備をする必要があるとしている。そして、蹴り出されたボールを蹴り返すことやゴールキーパーの特権であるボールを手で取って蹴ることを推奨している<sup>24</sup>。

フルバックのプレーについては、「奪球(Tackle)」、「明確なる判断」、「蹴方の姿勢」、「確實なる蹴方」、「任意なる方向への蹴方」、「蹴方の種類」、「ヘッディング」、「快速なること」、「ゴールキーパーとの連絡」に分けられ解説している。フルバックの説明に関しては、ボールをキックする技術に関する説明が多い。

---

<sup>22</sup> 同上書、30-35頁。

<sup>23</sup> 同上書、98-113頁。

<sup>24</sup> 同上書、137-140頁。



フルバックの最も重要なタスクである守備の技術「奪球」の解説では、「第一に攻撃の方法を研究して然る後に應戦の策を講じなければならぬ（144頁）」とし、相手をよく観ることの重要性を提示している。そして、相手チームの攻撃方法を、3つ例示し、その対策を説明している。1つめは、相手のアウトサイド・フォワードがコーナー近くまでボールを前進させ、センター・フォワードにパスする場合、そのパスコースにポジションをとりボールを奪うこと、2つめは、相手チームがインナー・フォワードかセンター・フォワードにパスを狙っている場合、このどちらかからボールを奪おうとするのではなくて、ボール保持者のボールを奪いにいくこと、3つめは、アウトサイド・フォワードから反対のアウトサイド・フォワードへのパスを狙っている場合、ボール保持者に素早くアプローチすることで相手のキックミス进行を誘うことをあげている<sup>25</sup>。このように、相手フォワードにボールが渡った場合、どのタイミングでどのような意図を持ってボールを奪いにいくかを示している。しかし、ボールを奪う方法や、人に対して守備するマンマーキングなのか、スペースを守備するゾーンマーキングなのかということに関する言及はない。ボールの奪い方としては、現象を観て予測し、素早いボールへのアプローチやそれにより相手のミスを生じさせることにより、ボールを奪っていたと考えることができる。現象を観ることの重要性について「明確なる判断」の中で、「奪球に尤も必要な条件は明確なる判断である。判断を確實にするには観察が緻密でなければならぬ。敵味方のボールに対する一舉一動は絶えず熱心に注意して（146頁）」と述べている。

ボールを扱う技術について、「いつでも強く遠く蹴ることが肝要である。それは無論ボールを味方のゴールから出来得るだけ遠ざけしめねばならぬからである（147頁）」とし、遠くに蹴るポイントとして、「四十五度位に蹴るのが尤も遠距離に到達する（148頁）」としている。ボールへのインパクトについて、つま先でボールを蹴ると少しでも当たりがずれると思ってもみない方向に飛んでいくので、「成るべく平たい所をボールに當てる様にするがよい。靴の横側でやるのも又一法である。外側よりは内側を使ふのは安全である（149頁）」とし、この技術を身につけるのは多くの練習を行うこと、まずは方向と距離を正確にし、それができるようになったあと、強く蹴ることの練習をするよう勧められている。

基本的なキック技術のほか、フルバックのポジション特性として、止まっているボールのキック、転がっているボールのキック、バウンドしているボールのキック、浮いているボールを止めてのキック、ボレー、ショート・バウンドのボレーといったように様々な状態のボールをキックする技術が必要であることを提示している。

ハーフバックのプレーについては、「一般の注意」、「センター・ハーフ」、「ライト・ハーフとレフト・ハーフ」に分けられ解説している。まず、「一般の注意」で、攻守にわたり関わり続ける、精神力と体力が必要であることが述べられている。そして、ボールの奪い方として、「先づ一人はボールよりも、ボールを持つて居る敵に向かつて突撃する。そして何でも彼でも兎に角その敵を妨げる。初からボールを取らうと思つても、中々取れるものではない。只身を以て敵を妨げる。さうするとどんな敵でも大抵はボールがあやつりきれなくなる。かうしておいて他の味方にそのボールを取らせる。かうすれば必ず

---

<sup>25</sup> 同上書、143-146頁。

取れるが、自分は敵を妨げるだけで他の味方を取らせずとも、十分に練習しておけば自分でも取れるのである（156-7頁）」とし、ボールを奪いにいくとかわされてしまうので、最初に相手のプレーを制限することを勧めている。また、練習によりボールを奪う技術が向上し、自分でボールを奪うことができるようになるとも述べている。守備の際のポジショニングについて、「如何なる場合でも、ボールを持つてゐる敵のフォアワードを自分の後にするのは、ハーフバックには厳禁である（158頁）」とし、ボールより自陣ゴール側に下がりスペースを消す守備方法を示している。

「センター・ハーフ」は「敵のセンター・フォアワードと常に對抗しなければならぬ役であるから、常にその監視を怠つてはならぬ。成るべく敵のセンター・フォアワードから餘り遠ざからぬ様にするがよい（159頁）」としていることから、センター・ハーフが相手のセンター・フォワードをマーキングすることを示している。

「ライト・ハーフとレフト・ハーフ」に関する説明は、スローインとコーナーキックのキッカーとしての役割を述べている。また、守備の際は、相手のウイング・フォワードと対峙し、相手のセンター・フォワードへパスが供給されるのを妨害することが役割であるとしている<sup>26</sup>。

フォワードのプレーについては、「アウトサイド・フォアワード」、「センター・フォアワード」、「インナー・フォアワード」に分類し、前述したように執筆者が異なる。アウトサイド・フォワードでは、「任務に就て」、「資格に就て」、「攻勢にある場合の心得」、「守勢にある場合の心得」、「パッスの仕方、及びボールの止め方」に分けられ解説している。

アウトサイド・フォワードは、「ボールを敵地に深く運んで、自分の方のセンターニ（ママ）蹴渡し、ゴール攻撃の機会を與ふもの（164-5頁）」とし、間接的にゴールに関わるプレーヤーであるとしている。そのための資格として、「動作の軽快なること」、「ボールを扱ふに巧なる事」、「駆ける事の速きを要すること」をあげ、サイドの攻撃の際、相手チーム複数名で妨害されても、ボールを奪われず、得点チャンスを生み出すことを求めている<sup>27</sup>。アウトサイド・フォワードは、攻撃の際、サイドを突破し、センター・フォワードにボールを供給することが求められているが、守備には「全く力を用ふる必要はない（173頁）」としている。相手が攻めている場合、相手の守備はフルバックとゴールキーパーだけとなるので、味方のパスが届く位置にポジション取りすることを勧めている。

センター・フォワードに関しては、「一般の注意」、「アウトサイド・フォアワードとの連絡」、「ゴールに蹴込む時」、「ゴール・キックの場合」、「コーナー・キックの場合」、「ヘディング」、「ペナルティ・キック」に分け、解説している。センター・フォワードは、「敵のゴールに蹴込むのは、殆どセンター・フォアワードの任務」であるとしている。基本的に攻撃はウイングから展開され、センター・フォワードはウイングからのパスを待つ。パスを受けるポジションは、「敵に妨げられずに蹴れるやうな、且つゴールに成るべく近いところ（178-9頁）」であり、オフサイドに注意する必要がある。ボールを受けて、シュートすることが難しい場合、一度、インナー・ライトかインナ

---

<sup>26</sup> 同上書、160-163頁。

<sup>27</sup> 同上書、165-170頁。

ー・レフトにパスを出し、守備側がボールにつられた時にポジションを取り直し、改めてボールを受けてシュートする<sup>28</sup>。

シュートに関する技術として、ゴールまで、5.5メートルから7.2メートル（三、四間）ほどのところであれば、ゴールキーパーがボールの方向を予想しにくいように「足の側面でするパスの要領でやる（180頁）」この距離であれば、強いボールを蹴る必要はないとしている。また、「ボールを敵のゴール・キーパーがうまく手で受け取つたら、すかさず飛んで行つて、體で以てゴール・キーパーを、ボール諸共ゴールの中に押し込む。ゴール・キーパーには、常に誰も触れる事は出来ないけれども、ボールを持つてゐる時には、さはつてもかまはないから、（中略）ゴールに押し込むのである。この時兎角手で押したくなるが、手を用ひてはならぬ。體で押さなければ反則となる。體を少し横に向けて、腰と肩とで押せば、大抵は入つてしまふ（181-2頁）」とし、ゴールキーパーへのチャージで反則とならない当時のルールを利用した得点方法を述べている。

インナー・フォワードに関する説明は非常に少なく、アウトサイド・フォワードとセンター・フォワードの中間にポジションを取り、アウトサイド・フォワードとセンター・フォワードをサポートすることがタスクであるとしている。また、ゴール前にセンター・フォワードへの守備が厳しい場合は、センター・フォワードに代わってシュートをする必要があるとしている<sup>29</sup>。

ボールに関わる技術として、ヘディングの紹介がある。1917（大正6）年、東京高師は日本代表として極東選手権競技大会に出場し、中国に0-8、フィリピンに2-15で大敗している。この時初めて、ヘディングの要領が紹介されたとされている<sup>30</sup>。しかし、フルバックの説明で、ボールが浮いている場合、ボールを遠くに飛ばす技術としてではなく、相手のセンター・フォワードと「瞬間を争ふ手段」として、また、センター・フォワードの説明で、「足や體で間に合はぬ時の窮策<sup>31</sup>」として紹介している。つまり、国際大会への出場以前の段階で、すでに東京高師蹴球部ではヘディングの技術が認知されていたことがわかる。

## 6. まとめにかえて

日本サッカー草創期、東京高師ではどのようなサッカーが志向され、どのような技術が必要とされたのか。2つのサッカー専門書が発行された1900年代、イングランドでは、1-2-3-5のピラミッド型のシステムで、ロング・パスを利用する戦法が用いられている<sup>32</sup>。イングランドのサッカー史においては、ドリブリング・ゲームからキック・アンド・ラッシュ戦法、そしてロング・パス戦法へと選手の配置を変えながら戦術の主流が変化していった。日本サッカー草創期、すでにロング・パス戦法がイングランドなど他国で用いられているが、日本が他国と同様の技術水準があったと考えることは難しい。『フットボール』の東京高師の現役部員の解説からも、技術水準が低くてもプレーできるキック・アンド・ラッシュ戦法による攻防が行われていたと考えることができる。また、1950

<sup>28</sup> 同上書、179-180頁。

<sup>29</sup> 同上書、192-193頁。

<sup>30</sup> 山田午郎『蹴球のコーチと練習の秘訣』目黒書店、1932年、80頁。

<sup>31</sup> 東京高等師範学校校友会蹴球部、前掲書、181-190頁。

<sup>32</sup> 竹腰重丸『サッカー』旺文社、1956年、30-32頁。

年代に日本代表を指揮した竹腰は、自身がプレーした1920年前後のサッカーについて、「パスということばは知らず、ドリブルとキックが攻撃方法の中心で（中略）この素朴なキック・アンド・ラッシュ戦法にたよっていた<sup>33</sup>」と回想している。キック・アンド・ラッシュの攻防では、自然とポジションによる攻守の役割が固定化され、そのタスクが明確になる。攻撃の局面では、フォワードが攻撃のタスクを担い、ハーフバックとフルバック、ゴールキーパーが攻守の切り替わりのときのリスク管理を行う。同様に、守備の局面ではハーフバックとフルバック、ゴールキーパーが守備のタスクを担い、フォワードは守備には参加せず、味方が大きくボールを蹴り出し、カウンター・アタックを仕掛けるための準備をしている。

本稿で検討したサッカー専門書には、サイド攻撃や守備の戦術に関する言及もみられる。『フットボール』では、ウイング・フォワードからのサイド攻撃のロング・パス戦法の端緒がみてとれる。しかし、それはウイング・フォワードにボールがわたった場合の説明にとどまっており、サイドを使った攻撃を意図的に実行するまでには至らない。また、守備の局面で、センター・ハーフバックが相手センター・フォワードをマンマークすることやハーフバックがボールより自陣ゴール側にポジションを取り、相手チームにスペースを与えないゾーンディフェンスの守備方法が示されているが、その概念が言語化されておらず、一般的に共有することは難しい。『アソシエーション・フットボール』では、フルバックの守備においてオフサイドを狙う方法の指摘があるが、『フットボール』では取り上げられていない。オフサイド・ルールは複雑であるため、草創期においては、攻撃或いは守備において、そのルールを利用した攻防を行うことよりも、ルールを遵守すること、つまり、オフサイドにならないポジションをフォワードが心がけていたと考えることができる。ボールを持たない攻撃側の選手が、オフサイド・ラインの後方のスペースを狙わないため、オフサイド・トラップは効果的な守備戦術と認識されなかったのかもしれない。1913（大正2）年、当時の強豪校であった神戸一中でプレーしていた選手の回想でも、「オフサイドが馬鹿に恐ろしくてフォワードの体形（ママ）はちょうどラグビーの夫れの如く、ボールを持った者が先に出て他は順次後方に追走して行った<sup>34</sup>」と、オフサイドの反則を怖がっていたようである。このように、日本サッカー草創期においては、ゲームで勝利することよりも、各選手が競技規則を遵守し、反則のないゲームを成立させることに力点が置かれていた可能性がある。

日本サッカー草創期は、技術水準が低く、戦術的にはキック・アンド・ラッシュに頼らざるを得ないことが想像できる。また、サッカーの技術や戦術に関する共通言語が乏しいため、サッカー専門書の記述もあいまいな表現であったり、とても細かい点を取りあげていたりする。それでも、本稿で検討したサッカー専門書には、状況を観て判断することの重要性や各ポジションのタスクの整理が試みられ、サッカーの基礎的な点が記述されている。日本サッカー草創期の技術と戦術をより詳細に明らかにするために、当時の選手や関係者の記述を検討することが今後の課題である。

---

<sup>33</sup> 同上書、29頁。

<sup>34</sup> 神戸一中ア式蹴球部編『ボールを蹴って50年』神中サッカークラブ、1966年、20頁。